

紀 要

地震考古学の発展に向けて濱 修 (1)

滋賀県竜王町堤ヶ谷遺跡出土の土偶形容器と石器について
.....中村 健二 (8)

弥生時代前期～中期の土器観察覚え書き
—針江浜遺跡と長命寺湖底遺跡の弥生土器—.....小竹森直子 (14)

古代近江における職能漁民の動向
—松原内湖遺跡出土の刺網系漁網錘の分析から—.....大沼 芳幸 (21)

滋賀県大津市国分所在礎石「へそ石」の周辺
.....小松 葉子 (31)

近江国野洲・甲賀郡境をめぐる一考察
—大山川流域の条里地割を手がかりとして—.....辻川 哲朗 (44)

天井川の生い立ちを考える その3
—天井川と埋没河川との関係について—.....重田 勉 (52)

比良山系の山寺
—大津市歓喜寺遺跡について—.....小林 祐季 (57)

明治山と旅順
—乃木希典を求める人々—.....松室 孝樹 (60)

25

滋賀県竜王町堤ヶ谷遺跡出土の土偶形容器と石器について

中 村 健 二

1. はじめに

堤ヶ谷遺跡は滋賀県蒲生郡竜王町岡屋・堤ヶ谷に位置する弥生時代の集落で、標高約150mの平野部と比高差35mの尾根上に位置している（図1）。このような立地から高地性集落として理解されており、1981年に遺跡の存在が明らかになったが、大半は造成工事によって破壊され、詳細については不明な点が多い。その時に採集された遺物および1982・1983年の開発に伴う事前調査で出土した弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式）の土器や石器は、すでに、略報（岩崎1982）や市史（丸山1987）によってその一部が紹介されている。

今回紹介する土偶形容器や石器は、1982年に滋賀県教育委員会が調査主体となって、財団法人滋賀県文化財保護協会が実施機関として行った調査で出土したものである。2004年度の緊急雇用創出特別対策事業に伴う出土文化財資料化収納業務整理作業によって、整理・図化されたが、諸般の事情から出土文化財整理報告書での報告に至らずにいたものである。筆者は整理調査を担当した辻川哲朗氏から人形の土製品が出土していることを聞き及び、実測図の提示を受け、実測図から土偶形容器の可能性が高いと判断し、実物を実見した。

その後、資料紹介する機会を失っていたものを今回報告することとした。今回、土偶形容器を紹介するにあたり、新たに辻川氏から未報告の石器実測図の提供も受け、既存の略報では、実測図の提示等がないことから、これらの石器についても併せて紹介することとした。これらの石器は、弥生時代中期中葉の土器に伴うものとされているが、出土層位や遺構等の詳細については不明な点が多いため、弥生

時代以外のものも含まれている可能性もある。以上のような点を踏まえた上で、弥生時代の遺物という観点から紹介する。

2. 土偶形容器

図3-1は人形の土製品であり、顔面部分のみが残存し、顔面の左半分は欠損している⁽¹⁾。残存部において長さ5.1cm、幅4.5cmを測り、頭頂部中央が下がり、頭頂右側が高く、平坦面をもつ。上から見た図でもわかるように、顔面から直角に後ろにつながり、中空の容器であることが推測できる。顔面は目を棒か指により凹ませ、鼻は粘土を付加し高くして、細い棒状工具で鼻穴を表現する。口も同様に凹ませて表現し、顔面全体がハート形に近いような形状をし、目の右側部分の幅の広いところが耳となる。頭頂部目の上に篋先による3つの刻み目と耳裏にも小さな刻み目をもつ。白っぽい色調を呈し、磨滅が激しく調整は不明である。

中空の容器であり、土器と同じように粘土紐を積み上げている特徴は、近畿地方の縄文時代や古墳時代以降の人面表現のある土製品にはないことから弥生時代の土偶形容器もしくは人面付土器のいずれかと考えられることが可能である。本例は図でもわかるように顔面から後方には直角に近い角度で口縁部が後方に延びることから、土器の前面に顔面が貼り付いたというよりは、顔面部分が容器部分と一体化している。また内面には左上がりの粘土の接合痕が明瞭であり、人面付土器は土器の形を整えた上で顔面表現を付加することから、口縁部内面は平滑になる場合が多い（設楽1999）点とは異なった特徴をもっている。

このような特徴から、本例は土偶形容器と考えられる。

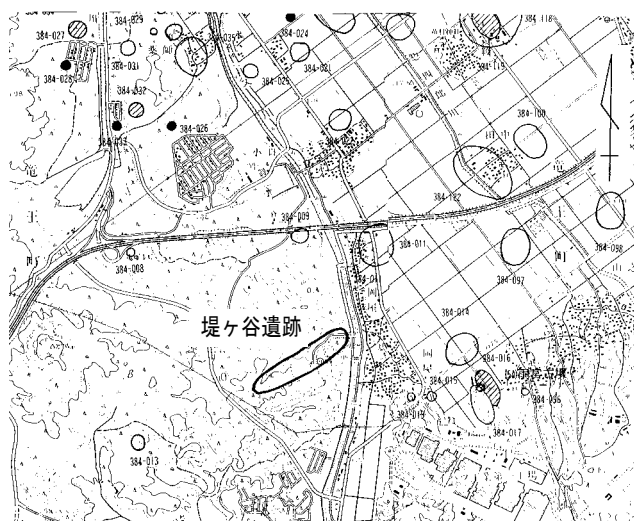


図1 遺跡の位置図（S=1/50,000）

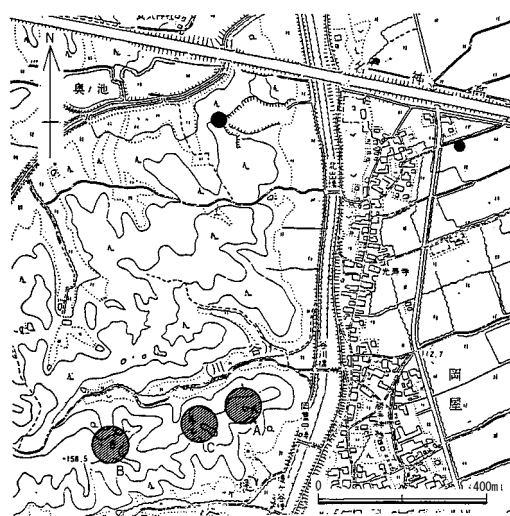


図2 1982年の調査地点位置図

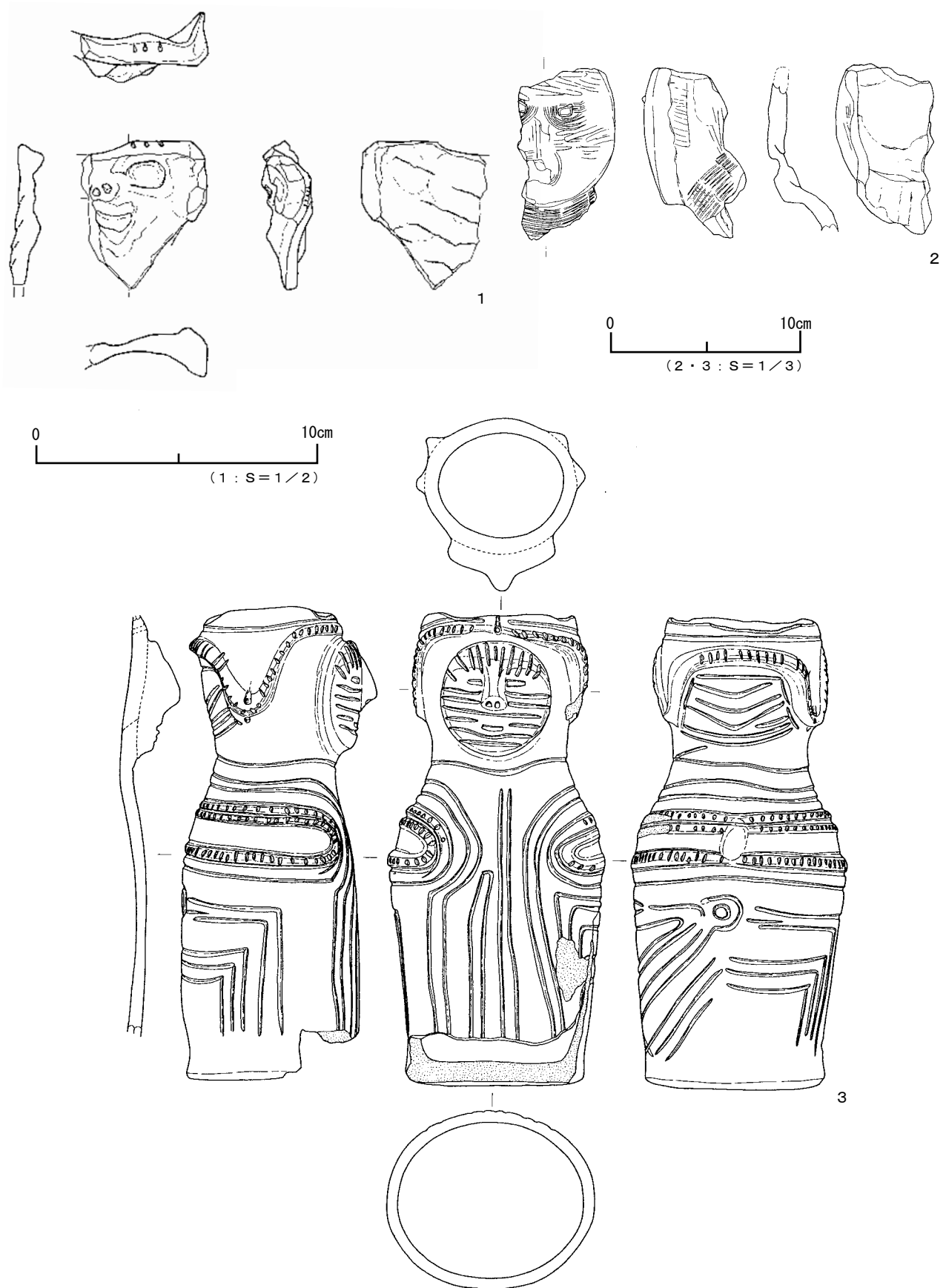


図3 土偶形容器実測図
(1. 堤ヶ谷遺跡 2. 赤野井浜遺跡 3. 長野県下境沢遺跡)

守山市赤野井浜遺跡で出土した土偶形容器（図3-2、滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2009）では、顔面内面に本例と同様に粘土の接合痕が残るが、円板状の接合痕跡があり、本例とやや違いがある。赤野井浜遺跡のような製作技法については、正面に顔面が入る部分を開けて頭部を作り、顔面をはめ込んで接合するという中部・東海地方の土偶形容器の製作技法（設楽1999）と同様である。赤野井浜遺跡と比較した場合、本例は幅2cm程度の粘土を積み上げて頭部まで作られており、通常の土器の作り方と同様である。こうした点から考慮すれば、人面付土器の可能性もないわけでもない。

土偶形容器と人面付土器₍₂₎では、土偶形容器が弥生時代前期頃、人面付土器が中期初頭に成立して土偶形容器は中期中葉で消滅し、人面付土器は中期後葉で消滅するようである（黒沢1997）。成立時期や分布の中心は若干違うが、ほぼ同時期に存在することから土偶形容器と人面付土器とは互いに影響を与えている（黒沢浩1997・設楽1999）ようである。本例が報告されている第Ⅲ様式の土器と同時期であるとすれば、土偶形容器の消滅直前の時期にこうした交流の中で顔面部の製作技法が変化したのかもしれない。

では、本例の顔面の特徴は東日本の土偶形容器、人面付土器や赤野井浜遺跡の土偶形容器と比べた場合、どのような特徴があるのであろうか。図3-2に見られるように顔面に黥面表現が施される点が東日本地域の土偶形容器や人面付土器の共通する特徴であり、図3-1は黥面ではなく、頭頂部（口縁部）と耳の裏に刻み目をもつ点以外は、文様をもたないという違いがある。西日本では、日本海側地域を中心に黥面をもたず、中実で土器の一部に貼り付けられる人面付土器が前・中期を中心に分布する一方で、弥生時代前期の岡山県田益田中遺跡の人面付土器や中期前葉の赤野井浜遺跡の例のように黥面表現をもつものも存在している。本例は黥面をもたない点で、西日本的な人面付土器との関係が強いように見えるが、頭頂部や耳の刻み目は東日本の土偶形容器と関連を見ることができる。

図3-3は長野県下境沢遺跡の弥生時代中期前葉に比定される土偶形容器₍₃₎である。この土器は円形の顔面に広めの頸部から耳状部分をもつ。顔面の上部の隆帯が耳状部分から後頭部につながり、刻み目を入れている。顔面の中心にあたる部分に刺突による縦位線が認められる。堤ヶ谷遺跡（図3-1）の刻み目はこの表現が退化したと見ることができる。図3-3に比べて、図3-1は目のすぐ上が頭頂部（口縁部）がある上、すでに述べたように顔面の中心では、頭頂部（口縁部）が下がっている。図3-3のように顔面と頭部の区別が明確であったものが、顔面が上方へせり上がり頭部と一体化した結果、図3-1が成立してくるという変化を見ることができる₍₄₎。目の上部の刻み目は隆帯がなくなること、頭頂部（口縁）部の端面を刻むようになり、耳部の後方も隆帯がなくなり、刻み目だけが

残り、刻み目も小さく、軽く刻まれている。以上のような形態的变化から堤ヶ谷遺跡の土偶形容器は下境沢遺跡より後続する時期が与えられる。さらに、黥面表現をもたない点から考えれば、東日本地域との関係を保ちながら、黥面の描かない独自性も保っているといえる。黥面表現の喪失は、西日本的な人面表現の影響であるとすれば、赤野井浜遺跡の土偶形容器のように西日本的な櫛描文という方法で黥面を描くものよりも、黥面を描かないという点、東日本地域の土偶形容器の規範から大きく外れる点から、赤野井浜遺跡の例より後出であることは間違いない₍₅₎。堤ヶ谷遺跡の土偶形容器の年代は櫛描文で黥面を描くという形態的特徴から中期前葉（第Ⅱ様式）に伴うと考えられる赤野井浜遺跡の土偶形容器に後続し、周辺から出土している中期中葉（第Ⅲ様式）の時期に比定することは可能であるといえる。

3. 石器

本遺跡の石器については、略報に石鏃、石槍、石錐、砥石、叩石、作業台が出土していることが報告され、そのうち石鏃については検討が加えられている（岩崎1982）。今回、すべての器種ではないが、既報で触れられた器種の大半について図示し、紹介することで、既報を補うこととする。

図1-1～13は石鏃で、岩崎直也氏の分類（岩崎1982）の分類にあてはめれば、凹基式無茎鏃（図4-3）、平基式無茎鏃（図4-1・4・5・7・8）円基式無茎鏃（図4-6）、凸基式無茎鏃（図4-10・11）となるが、図4-3の凹部は明瞭でなく、平基式に、図4-10は有基部の作り出しが甘く、円基式にも分類できる。図4-4・5は先端が欠損し、図4-2・13は基部が折れている。図4-14～16は石錐で、小さな基部から幅広で長い身部をもつもの（図4-14）や基部から幅が狭く、短い基部をもつもの（図4-15）がある。図4-17は石槍の破片で、図4-18は削器である。これらの石器の石材はサヌカイトである。

図4-19～21は磨製石斧や磨製石斧を転用した石器である。図4-19は欠損した蛤刃石斧の基部を楔に転用したもので、図4-20は扁平片刃石斧で、腹面は一部剥離している。図4-22は紅簾片岩の円板状に加工された石器で、下端は欠損している。滋賀県内の弥生遺跡出土の紅簾片岩を素材とした石器の多くは、玉作りに使われる石鋸であることから、本例も石鋸を転用した円板と考えることが可能である。図4-23～28、図5-1～4は砥石である。図4-26・27は有溝の玉作用の砥石で、26は1条の溝があり、27は3条以上の溝がある。図4-23～25・28、図5-1～4はいずれも使い込まれており、図4-24・28、図5-1・4は使用面には幅広い凹みをもつ。図5-1は受熱し、図5-2は破損した面にも使用痕が認められる。使用される石材は流紋岩、砂岩などである。

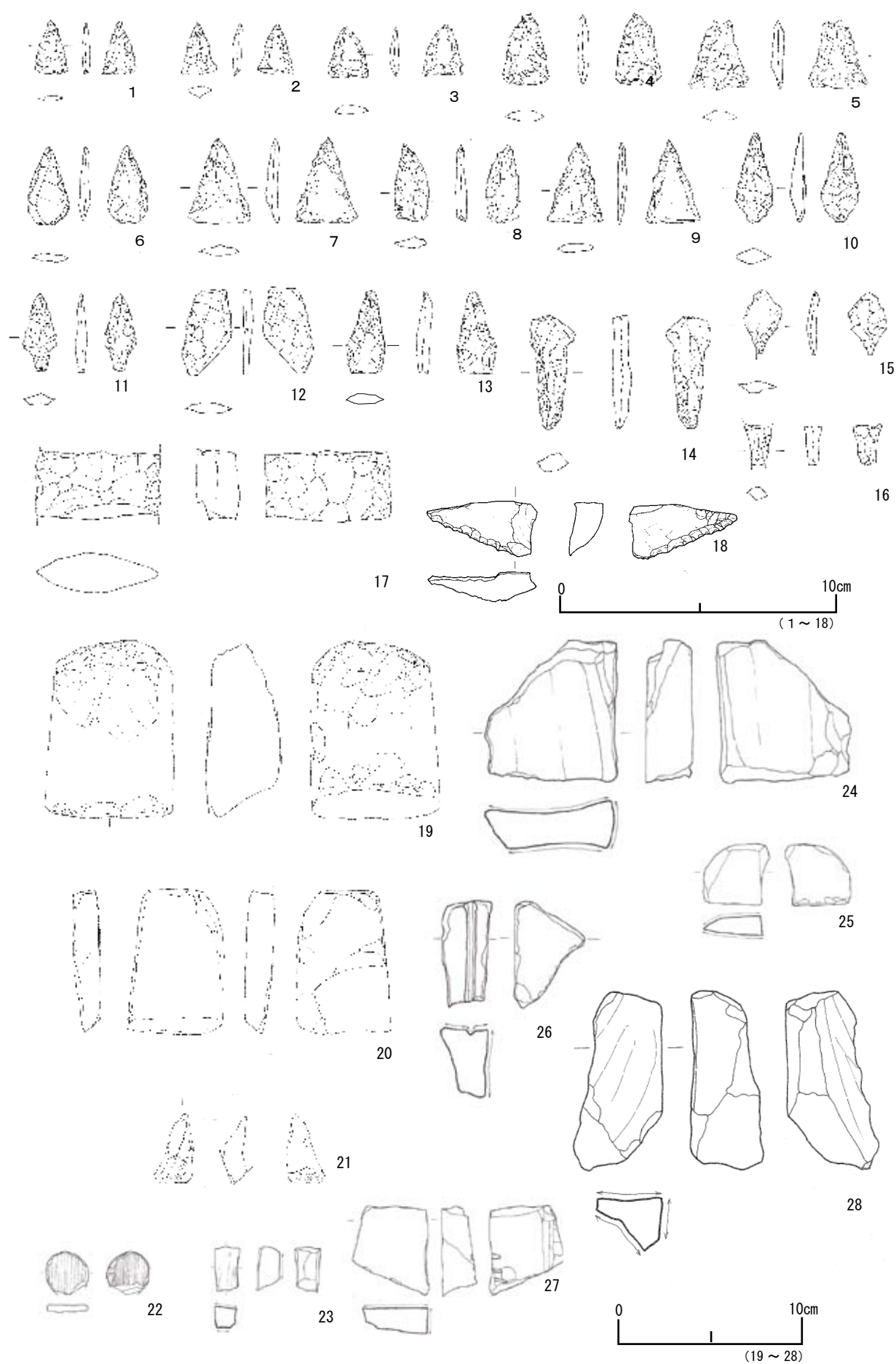


図4 堤ヶ谷遺跡出土石器実測図（1）

4. まとめ

当遺跡はすでに述べたようにその立地や石鏃・打製石槍、有柄式磨製石剣の存在から弥生時代の高地性集落との位置付けがなされていた。今回、略報では詳細に示されていない土偶形容器や石鏃・石剣以外の石器を紹介することによって、当遺跡の弥生時代集落の新たな一面が明らかになった。その点を箇条書きにしてまとめたい。

1. 滋賀県内2例目となる土偶形容器が存在から弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式）段階での東日本地域との交流の痕跡が確認されたこと。

2. 玉砥石である有溝砥石、石鋸転用の円板や今回、図化報告はしていないが碧玉製の剥片の存在から玉作りを行っていた可能性が極めて高いこと。

註

(1) 実測図は、口縁部にあたる頭頂部分に平坦面が水平になるように表現しているが、裏面の粘土痕が極端な左上がりになることから、顔面中央部の凹み部分を水平に右側の頭頂部分が右下がりになるかもしれない。

(2) ここでいう人面付土器は、黒沢浩のいう人面付土器A（黒

沢1997）、設楽博己のいう黥面付土器（設楽1999）のことである。

(3) 設楽博己は図3-3を当初、土偶形容器との製作技法の共通点はあるものの黥面付土器（設楽1999）としていたが、後に土偶形容器としている（設楽2007）。

(4) 堤ヶ谷遺跡の土偶形容器の頭頂部中心が下がる点は、眉毛表現が頭頂部と一体化したと考えるとわかりやすい。人間の顔を見た場合、眉毛が鼻付近でなくなり、眉毛が鼻に向かって下がることから、堤ヶ谷遺跡の例は、この状況を忠実に表しているといえる。いずれにしても、顔面上方の隆帯や眉毛表現から退化したものと捉えることができる。

(5) 設楽博己によれば兵庫県神戸市大蔵山遺跡出土の人面付土器が土偶形容器の可能性が高いようである（設楽1999）。時期は弥生時代前期末で、黥面表現はないことから、近畿地方では本例より古い段階から黥面表現のない西日本的な顔面表現の土偶形容器が分布している可能性もある。

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年順）

岩崎直也（1982）「湖東平野における高地性集落の調査」『滋賀文化財だより』No. 68 財団法人滋賀県文化財保護協会

黒沢浩（1997）「東日本の人面・顔面」『考古学ジャーナル』416

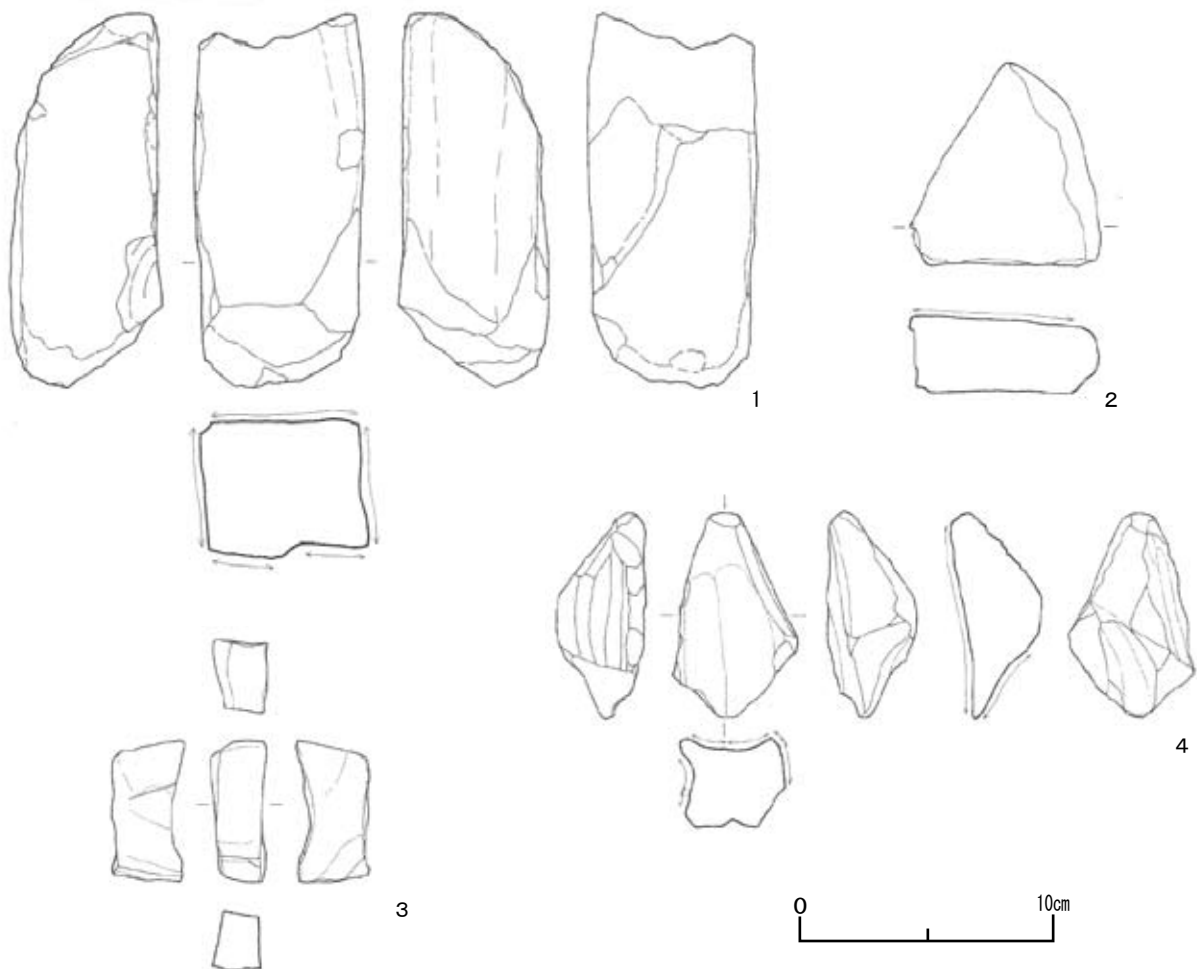


図5 堤ヶ谷遺跡出土石器実測図（2）

ニューサイエンス社

滋賀県教育委員会（2004）『平成13年度遺跡地図』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2009）『赤野井浜遺跡』（琵琶湖（赤野井浜）補助河川環境整備事業に伴う発掘調査報告書）

設楽博己（1999）「土偶形容器と黥面付土器の製作技術に関する覚書」『国立歴史民俗博物館研究報告』第77集

設楽博己（2007）「弥生時代の男女像-日本先史時代におえる男女の社会的関係とその変化-」『考古学雑誌』91巻2号 日本考古学会

丸山竜平1987「第1章 原始・古代の竜王町」『竜王町史』第1

巻） 竜王町

挿図典拠

図1 滋賀県教育委員会2004に拠り、一部改変。

図2 丸山1987に拠り、一部改変。

図3 図3-1:滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会、図3-2:滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2009、図3-3:設楽1999

図4 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

図5 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

（なかむら けんじ：企画調査課 副主幹）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.25 2012.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage